2024年　戦争体験を語り継ぐ集い

＜第３１集＞戦時体験記録集

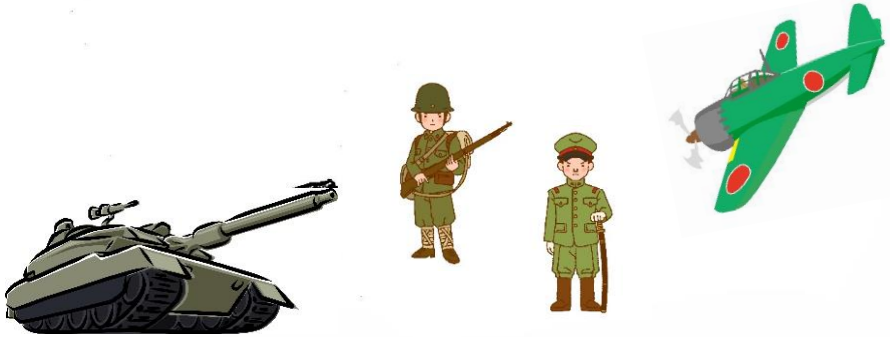
いつの世も　誰もが平和を　望んでいる

けれども　地球各地に　戦争の火種は広がっている

命も人権も尊厳も　保証されない国が　増えるばかり

戦争体験を語り続けることが

身近な平和や命を守る一助になりますように



戦争になると　人が人ではなくなります　命が命ではなくなります

第３５回『戦争体験を語り継ぐ集い』プログラム

令和６年７月２７日（土）１０～１２時

1.　開会の挨拶

2.　緑生涯学習センター堀田館長より

3.　語り継ぎタイム（1）

・大橋路代さま　　（P1）

休憩

4.　展示品説明など（会員：上田・吉井）

5.　語り継ぎタイム（2）

・水野晴仁さま　　（P4）

6.　閉会の挨拶

はじめに

◇「戦争体験を語り継ぐ集い」とは

名古屋市主催講座であり、緑生涯学習センターの主催事業です。進行は「戦争体験を語り継ぐ会」が担当し、行政と市民が協働した取り組みを続けています。

戦争を知らない、のちの世の人たちのために、戦争が始まった時の現実はどうだったのか、戦時中の暮らし、軍隊生活の実際、危険と隣り合わせの毎日を過ごさなくてはならない、厳しい現実になることを、伝えています。戦争の悲惨さを伝えることで、平和と平和を守る大切さを、考えていただける機会にしていただくことを願っております。また、体験者ご自身に直接語っていただくことの重みを大切にしています。命の大切さ、平和のありがたさへ思いを馳せる機会になることを願いながら、毎年開催しています。

◇戦時体験記録集について

戦争を体験した方々の声が減少しており、高齢化や聞き取りの難しさが現状です。今年は語り部としては登場しませんが、聞き取りに応じて体験者のお話を掲載できることになりました。体験には非常に過酷な現実があり、昨年の記録も含め、その内容を読むことで心が揺れることもあるでしょう。しかし、それこそが「戦争の現実」です。その重みを受け止め、今を生きる私たちの人生や命、そして平和への思いを新たにする機会と捉えています。今年も掲載へのご協力へ感謝申し上げます。変わらぬ平和への願いを込め、二度と悲惨な戦争を繰り返さないために、平和の礎の一助となれれば嬉しく思います。この冊子を手に取ってくださる皆様から、平和への祈りが広がりますように。

◇戦時体験記録集 ★ 総まとめへの歩み◇

今年で第31集を発行しました。「戦時体験記録集」の総まとめ作業は一昨年から続けており、まだ試行錯誤の段階ですが、皆で協力しながら頑張っています。完成を目指して努力を重ねていますので、完成の際にはぜひ手に取っていただければと願っています。ご案内を希望される方は、当日またはセンター窓口でお申し出ください。

「戦争のない平和な世界を！」今年もご賛同くださいました皆さまのご協力により、戦時体験記録集が完成いたしました。感謝申し上げます。

戦争体験を語り継ぐ会　一同

※ 記録の中に含まれる表現に関しては、差別を助長するものではありません。

<第３１集>戦時体験記録集

◆目　次◆

＊語り部タイム＊

戦争の中で人は（大橋路代）　－－－－－－－－－－－－　P1
妻子を樺太（サハリン）に残して　ジャングルに放り出されて
人間魚雷の命を受けるも
シベリア抑留と引き揚げ　－－－－－－－－－－－－－－－　P4

＊2023年語り部タイム記録＊

－ 満蒙開拓団 －　ひとり生き残って
１０歳の絶望から平和の大切さを伝え続ける
ピースあいち語り手の会　会員（橋本克巳）－－－－－－　P5
戦後にも禍根を残す
戦争体験語り継ぐ会 会員（江間万里子）　－－－－－－　P11
昭和のくらしと戦争
戦争体験語り継ぐ会 会員（福岡友一）　－－－－－－　P12

＊体験者は語る＊

佐藤親房　－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－　P15
種池富美子　－－－－－－－－－－－－－－－－－－－　P18
舟岡洋子　－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－　P20
西﨑邦雄　－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－　P24

２０２４年　語り部タイム

戦争の中で人は

大橋　路代

①　父の場合ー妻子を樺太（サハリン）に残して

1945年5月20日樺太生まれの私。現地の飛行場勤務だった父たち軍隊は”転進”の命で、4月に本土へ。本土空襲の様を見てびっくりし、毎日「早く帰れ」と電報を打ったと。近所の人たちの助けで出産した母は、ソ連参戦の報の中友らと乳飲み子を抱えての帰途。辛うじて港に着くも船は爆撃を受け、乗れずー

子どもの私に、語るべき物語がどれほどあったでしょう。私の名前は樺太の内路村からの命名と知りました。

軍隊は国民を守るーというのは、戦下においてはありえないのだと思ったものです。

②　M叔父の場合ージャングルに放り出されて

「戦争体験を聞かせて」と真っ向から聞くことができました。

1944年4月航空隊（通信部）に入隊。マレーシアに向かうも戦況悪化でマニラへ。45年5月から米軍と対戦。昼は隠れ、闇に紛れての切り込みもどんどん劣勢、とうとう7月半ばにジャングルに。

すでに白骨化した多くの遺体を目にした隊長は「自分の食料は自分で」と。放り出された集団はお互いに疑心暗鬼、運よく手に入れた食料も奪われないよう銃剣をかまえて寝る状態だったと。この時、叔父は殺されそうになったそうです。マラリアに罹り死線をさまよったことも。9月17日武装解除、12月7日、親の待つ名古屋へ。

③　K叔父の場合ー人間魚雷の命を受けるも

（M叔父からの話。K叔父逝去後）

海軍に属し、8月15日に人間魚雷として命をうけながら、敗戦の放送を聞くことに。負けたとわかっても、上官の命令はそのまま続行。迷いに迷って出撃しないことを選んだ叔父は、出撃していった戦友に

終生負い目を感じて生きていたと。しかも、その経験や戦争に関することは一言も、妻にも語らぬまま旅立ったと。

語ってくれたM叔父は、「あの放送の中で、『戦地での全ての作戦を停止せよ』の言葉があったなら、8月15日以後多くの兵士が死ななくてもよかったのに」と、悔しがっていました。

戦時中三人の息子を出征させながら、三人とも無事に両手に抱きしめることができた祖母は、幸せな母でした。けれど息子たちの口はそれぞれに重く、胸襟を開いて語り合うことのなかったように思います。

語ることで歴史を繋げるとわかっていても、語れない場合があります。幸いにも、父母からも叔父からも聞くことができました。ですが、時代の制約でしょうか、誰の話の中にも、他人の視座・平和の視点が入っていませんでした。これからの私たちの課題だと思います。

物事の本質がよくわかるのは、抑圧された側・差別された側からの視点だと、沖縄・福島からの発言で気づかされました。真摯に受け止めたいと思っています。

1941年12月8日開戦宣言に対して、1945年8月15日はっきりと「日本は負けたので、全ての戦線において停戦を宣す」と言っていれば、多くの犠牲を出さなくて済んだのにーと思います。

ここに、沖縄タイムスの記事を紹介します。少し長くなりますがご容赦ください。

-*-

「朕は戦いを宣す」との昭和天皇の詔勅で太平洋戦争が始まった。その結果、悲惨な沖縄戦や広島・長崎への原爆投下などで多くの尊い命が犠牲になった。犯した大罪について国民や、当時植民地だった韓国・中国（東北地方）に対して天皇が自身の声で謝罪したことがあるだろうか。天皇であれ、犯した罪は謝るべきである。平成天皇はそのことを身に染みて感じていたからこそ、「贖罪」としての慰霊の旅を繰り返したのではないだろうか。

日本の敗戦が濃厚となり、近衛文麿首相が終戦を具申した1945年2月の「近衛上奏分」を昭和天皇は拒否した。沖縄戦が始まる前であり、天皇

が受け容れたならば沖縄の惨禍や広島・長崎への原爆投下はなかったはずだ。1975 年 10 月、昭和天皇が米国で記者会見「原爆投下はやむをえない」と発言したことはあまり知られていない。

日本政府が長年、存在を否定していた「天皇メッセージ」が 1979 年、新藤栄一筑波大学名誉教授によって米国の公文書館で発見され、公表された。内容は「日本国天皇は沖縄に対する米国の軍事占領が 25 年ないし 50 年あるいはそれ以上にわたって続くことを希望する。これが日本の防衛に役立ち、かつアメリカの利益になるだろう」というもの。

日本政府も公式記録として認めているが、国民に広く知られているとは思えない。そのことがのちのサンフランス平和条約や日米安保条約につながり、今日の沖縄軍事植民地状態をもたらす元凶になっている。

（沖縄タイムス　論壇　改元天皇制議論の機会　宮城信雄　2019,5,12 ）

-*--*-*-*-*-*-*-*-*- -

本土にいては痛感できなかった”痛み”がこの文面からにじみ出ています。戦争体験を語り継ぐ世代も、だんだん少なくなってきています。これからの日本を考え、作っていく基本を、ここに置きたいと思い、紹介しました。

（2024.5.31 記）

シベリア抑留と引き揚げ

案内役（現職高校教諭）水野　晴仁

１９４５年８月９日、日本では長崎に原子爆弾が投下されたその日、ソ連が満州に攻め込んできて始まった日ソ戦争。不意のソ連軍侵攻に立ち向かったのが、満州軍の国境守備をになった関東軍でした。彼らは８月１５日の天皇陛下による降伏も知らずに戦い続け、８月２１日にソ連軍によって日本が敗戦したこと知らされるのです。関東軍は、そのままソ連に連行され、ソ連の復興事業に駆り出されます。戦後間もないこの時期、ソ連では食料も満足に提供されず、マイナス４０度の極寒のシベリアで、多くの日本人が飢えと寒さ、そして伝染病に苦しんで亡くなりました。生き残った彼らが日本に引き揚げてきたとき、彼らが遭遇したのは・・・？

２０歳の徴兵年齢が１歳引き下げられ、１９歳で徴兵された「史上最年少の日本軍兵士」の橋詰四郎さん（故人）の戦争体験を、次世代に語り継ぎます。

＜内容＞

１．戦争当時の日本の社会
２．軍隊生活
３．ソ連との戦争
４．シベリア抑留生活
５．日本への引き揚げ

２０２３年　語り部タイム記録

－ 満蒙開拓団 － ひとり生き残って

１０歳の絶望から平和の大切さを伝え続ける

ピースあいち語り手の会 会員　　橋本　克巳

88 歳にもなりますと、5 分前の出来事をよく忘れて、孫があきれるほどですが、今から 79 年前の出来事は忘れようにも忘れることができません。

中京競馬場の近くに、私の満洲時代の小学校で親しかった同級生がいます。日中国交回復ができた頃、電話番号を探して「一緒に満洲に帰ろうか」と電話をかけたら「どうして電話番号を調べたんだ？！わしは、満洲なんか、もう忘れたいと思ってるんだ。満洲のまの字も聞きたくない。どこでどう調べたか知らんが、今後、一切、電話をかけてくるな。満洲なんかはもう永久に忘れたいんだ」と、お叱りをいただきました。「この人も戦後は終わってないんだな、私と一緒なんだな」と思いました。その話を聞きながら「一切の海外旅行はしない」と心を定めて、今日に至っております。忘れようとて、忘れようとて、毎日、努力をしていても、この８月近くになりますと、どうしても思い出します。それは、敗戦民族がたどる地獄の道です。思い出したくとも思い出したくない物語ですが、胞子として湧いてまいります。『君の名は』冒頭のセリフ『忘却とは忘れ去ることなり。忘れ得ずして忘却を誓う心の悲しさよ』１時間でかいつまんでお話しすることを、ご理解をいただきたいと存じます。

私は新城の奥の三河山間部に昭和 10 年に生まれました。父は猫の額ほどの土地を耕しておる水呑百姓、血統書付きの貧乏家族です。そこから父は脱出したいという折、国策として進めておった満州移民「満洲に新天地を開こう。満洲に行ったら【20 町歩：東京ドーム 4～5 個分】の土地をタダでくれる」これに親父は引っ掛かった。タダほど怖いものはないんですよ。住み慣れた古い歴史ある橋本家、そのふるさとを売り払い、一家を挙げて満洲に渡りました。

満洲は肥沃な土地だと言われておりましたが、そうではありませんでした。湿地帯、粘土質のじめじめした場所で、畑には適してなかったんです。「騙された」と、開拓の村から逃げようとする人もあったが、日本に伝わると大変だというので、みんなして捕まえ、説得し、村に押しとどめました。明日から食べるため、耕作をしなければなりませんが、湿地帯で 20 町歩、トラクターは開拓団に一つしかありません。ガソリンの配給まで始動できず、原っぱの真ん中に置かれたままでした。日本から持っていった、鍬、備中、スコップ、などで２０町歩の土地を耕すなんてできません。

では、どうしたか。満洲の方々、現地住民、先住民の方々の土地をタダ同然で取り上げるより道はなかったと思います。その方々も、移住してきて、湿地帯の中で比較的低地よりちょっと高いところを、200 年あるいは 300 年、歴史を重ねながらようやく作物のできる土地にしたと思うんです。それをただ同然で取り上げたというのが事実、まさにこれは侵略であります。よそのご家庭に土足で踏み込んで、宝というのか、欲しいものを手当たり次第、持ってくるのと一緒なんです。そういうことをわれわれはせざるを得なかった。しなかったら、餓死するより道はないんです。

私は子どもだったので、現地の事情などは、日本へ帰ってきて、勉強して知りました。心の中には「父に連れられた」だけで事を済ましてはいけない「侵略者の子どもである」自覚は、骨の髄まで染み込んでおります。ですから、日中国交回復後「満洲へ帰りませんか」とお誘いを受けても、絶対に受けなかった、行かなかった。

満洲は、電車もバスも何にも走ってない、動くには歩かなきゃならない、しかも、見渡す限り、草原です。その草原の中にはオオカミが住んでいる、１人で歩くなんて絶対、許されない。5～6 人で、誰か１人、鉄砲を持って歩かないと歩けない状況です。まず、必要なものはずんぐりむっくりした格好の力のある馬を手に入れることでした。わが家も２頭、私が小学校４年生になった時には、私用の馬も手に入れてくれました。牛、豚、鶏、作るものは、大豆、じゃがいも、小麦、トウモロコシ、そのような作物を作って、生活を支えておりました。

なぜ、日本は国策として、満洲に移民を強制したかったか。当時は「産めよ増やせよ」の時代だったが、人間が増えれば食料もいる。次男坊、三男坊の働き場所対策の一つでもあった。ソ連との間に不可侵条約を結んだが、いつ攻め込んで来るかもしれない。開拓団員は防波堤、楯であ

った。だから、私の家にも小銃がありました。冬になると零下 30 度 40 度、想像もできない、寒いを通り越して痛いという状況の中、ここを第二のふるさととして「やがて、この荒野が黄金色の実りの秋を迎えるんだ」そういう夢を抱いて、父と母は一生懸命に働いた。その夢の中に戦闘の足跡がひしひしと迫ってまいりました。

国策だったけれど、愛知県は濃尾平野という広大な耕地があり、多くの軍事産業の工場があるから、募集しても集まらなかった。その中でたった一つ、三河の人たちだけを集めて、辛うじて一つ、開拓団を作ったんです。

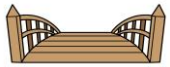
その人たちの願いは「この荒野がやがて豊作の秋を迎える」これを夢見て、一生懸命働いてきたのに、戦闘の足音とともに、父は兵役免除の約束を破られ、夜こっそりと、現地の人々に気付かれないように戦場に赴いてまいりました。

戦争花嫁という人たちも哀れでした。男の人が満洲に渡って、開拓をする、1人ではできませんので「大陸の花嫁」と、もてはやされて多勢の女性が、見合い結婚で家庭を築きました。その人たちを集めて、竹やりを持って、軍事訓練が始まった。この辺りから上級生の人たちが「日本の国は危ないよ」っていう話が、私たちにも聞かされるようになりました。

やがて、昭和 20 年 7 月中旬だったか「もう、学校へ来なくてもいいよ。お父さん、お母さん、おばあさんのもとで手助けをしてください」と学校が閉鎖されました。そして、村から若い人たちは全部、招集で取られ、残されたのは 50 歳以上の男の人、しかもその人たちがなんと 8 月の 14 日に招集を受けて、村から離れた。女性と子どもしか残らなかったんです。でも、さすがに戦場で行くところがなく、14 日の晩には戻ってこられました。西暦 1945 年 8 月 15 日、日本はポツダム宣言を受諾。（ポツダム宣言受諾＝無条件降伏）

戦後、帰ってきて、満蒙開拓団の当時の状況をいろいろ調べてみましたら、満洲に渡った 800 の開拓団の中、15 人以上が集団自決をしたのは、なんと 48 開拓団もあったんです。

自決の様子は当時うわさ話として聞こえてきました。親が子どもを殺して自殺、学校の教室で全員焼死、川へ入水自殺、聞くに堪えないむごすぎる話でした。日本の教育の影響、「大和魂」といって「生きて虜囚の辱めを受けず」また「二夫にまみえず」という教育方針でありました。「虜囚は捕虜、



男はこき使われたり、拷問を受けたり、女性は男の慰め者になるようなことは日本人の恥だ、潔く死になさい」というのが日本の教育方針であったんです。それが「大和魂」だと教えられておったんです。だから、48開拓団の人たちは尊い命を集団自決、集団自殺という状態で生涯を終えた。さぞかし無念、極まりない思いであっただろうと思うんです。こんな思いで満洲に渡ったんではないんです。

私たちも、それから、匪賊の襲来を受けました、夜となく昼となく。無条件降伏で武器は全部、捧げましたので、何もありません。言うなりにする、抵抗したら命はない。10 歳そこそこの私は、人が銃殺されるのを、お隣に住んでたご主人が銃殺をされた、そういう姿を目の当たりに見ております。忘れようとて忘れることは生涯ありません。

凍てつく荒野を二転三転、あちらこちらの開拓団と身を寄せましたが、行く先々に安住の地はありませんでした。匪賊が肥大化して、10～15 人がだんだん多くなり 30～50 人という大きな匪賊の集団になって、大砲まで持っておるといわれるほどの匪賊になって開拓団を襲うんです。それはひどい。もう本当にリアル過ぎて、皆さんがたが卒倒するような、そういう姿を見てまいりました。女性は哀れでした。目の前で犯される、拒否したらやりで突かれるというような、むごたらしい場面がこの身に今でも焼き付いて離れることはありません。さまざまな道中は省きますが「とてもこの開拓地におっては命の安らぎはない。都会に出たならば、何とかなるだろう。大勢の人が住んでるから、命の安らぎはあるだろう」と。近くにチチハルという比較的大きい、10 万ぐらいの満洲の一番北の果てにあり、そこを目指そうということになったんです。

そんな折、シベリアに抑留される列車が野原のど真ん中で止まった、運転手の生理的現象なんでしょうね。その時に 7、8 人で脱走して、2 人ほど犠牲になりましたが、わが父は私たちのことを心配し、あの広い荒野を探し回り、再会できました。これは不幸中の幸いで、忘れることができません。

その父の勧めもあって、私たちはチチハルを目指し、15～16 名が一つの人数で歩きました。電車もバスもない、歩くよりしょうがない。真冬ですよ。吹雪の日もあれば、昼間でも、零下 30 度 40 度、その中を歩くより道はない。道中には沼も、川もあるが、橋もない船もない。あっても船賃を出せないので、歩くより仕方がない。100 キロ？200 キロ？その道中を 10 日以上かけて歩いたことだけは覚えております。若い女の人たちは皆、緑なす黒髪、日本女性の美しい髪の象徴とも言われる髪を潔く断髪して、男のような格好をして。もちろん、全部、剥ぎ取

られ、着の身着のままの汚れた着物で、辛うじて零下 30 度に耐えられるだけの服装で歩き続けました。夜、野宿をしたら、全員凍死、野宿することは許されない。街道の近くの現地住民を頼り平身低頭をして一夜の宿を借りた。大体、お百姓さん、食物を作って、農業をいそしむ人たちに戦争の好きな人なんかはありません。「大変だったでしょう。一晩、ゆっくり休んでください」乏しい食料の中から粟がゆを作り、恵んでくださった。そういう 10 日間があればこそ、私は現在こうしてここにおることができるのであります。数々の恐ろしい思いもしました。冷たい銃口を何回となく、この額に引き付けられ、子ども心に体が凍りつきました。反面、温かいおもてなしをいただいて、今日の命があることを私は忘れることができません。だから、世界中の人間がみんな戦いの好きな人ばっかりではない、平和を愛する人のほうが本当は多いんではないかと、私はいつも思っております。国の命令で仕方がなく戦争に駆り出されたというのが事実だと思います。

チチハルへの道中、忘れられない出来事がありました。泊めていただいた村を翌朝出発しようとした時です。出口でたき火をしていた５～６人の若い衆が、変装させていたのに、目ざとく１７～１８歳の女の子を見つけ出しました。おんぶさせていたよその赤ちゃんも一緒に「この２人を置いてけ！置いていかなかったら命はないぞ！！」と脅され、仕方なく、２人の娘さんを置いて、去らなければならなかったんです。戦争の現実です。親はどんな思いであっただろう。もう本当に、いてもたってもいられない。

拉致された、略奪されたのです。それからの道中、誰一人、声を出す人はありませんでした。１時間半ぐらい歩き続けたところで、疲れたみんなを励まそうと思ったんでしょうか、その父親が万感の思いを込めて「今頃、たき火のそばでおもちゃにされてるわ」と。10 歳の私に意味は分からずとも、よういならん事態（よくない事態）に陥っているのだろうと思いました。「せめて命だけは落とさないでほしい」と子ども心に祈りました。やがて、日本へ無事に帰れたのか、満洲に残留孤児として残ったのか、そのまま殺されたのか、売り飛ばされたのか、その後の人生を知ることはできませんが。その子のことを思うと、簡単に戦争体験を語ることはできなかった。この辺はお察しをいただきたいと思います。

大変な出来事をありながら、ようやく、チチハルに着いて、「やれやれ、これで命が安全だ」と思ったのはほんのひとときでした。施設に詰め込

まれました。１畳に３人ぐらい詰め込まれ、生活をするんです。食料はコウリャンを朝と夕方だけ。医者はいない、薬はない、不衛生、極まりない。トイレは、空き地に穴を掘って、踏み板を置いて、男女の境もなく、全部、オープン。やがて赤痢、発疹チフス、コレラになると、下痢が激しく、探せるような余裕はなから、男女入り交じって、トイレをしなければならないという現実を味わってまいりました。

わが家でも、おばあさんと弟がまずチフスにかかり、亡くなりました。昭和 21 年７月７日、七夕の日、午後 12 時から１時ぐらいの間に、後先覚えがないが、お父さんとお母さんが、私の病んで寝ている枕元で、息を引き取りました。誰かの胸にすがって思いっきり泣きたかったけど泣くことすら許されなかった。今のような華やかな葬式を出すことはできなかった。アンペラ（日本のむしろ）の切れ端を拾ってきて、荒縄で辛うじて身体が見えない程度に縛り、てんびん棒で担いで郊外へ、２～３０㎝ほどの穴を掘って葬った。野犬かオオカミの餌になってしまったのだろうと思います。私は病気で墓場まで行けませんでした。

あとに残された弟、妹は、なお哀れでした。年も小さい、食べることもままならない、衰弱の一途をたどるしかないんです。やがてハエが卵を産み付けたのか、目尻から鼻から口から耳から、うじ虫となって、はい出てくる、それを取ってあげるのが私の役目でした。目は口ほどにものを言う。弟が「お兄ちゃん、何とかしてよ」そういう目で見られたことは、今でも脳裏に留まって忘れることもできません。最初の頃は、毎年のように夢に見ました。このごろでも、２年に１度ぐらいは夢に現れ出てきます。

戦争ほど、むごたらしいものはない、戦争ほど、むなしいものはない、もう本当に、心に焼き付きました。これを私は息の限り、皆さんがたに訴えて、戦争のむなしさ、戦争のむごたらしさ、悲惨さ、非業なこと、知っていただきたいと、皆さまがたの心に、魂に訴えようとして、ここに立たしていただいております。

世界、人類の歴史の中で、どこの国でも戦争がありました。

文字ができてからでも 4000 年猶予という歴史、その中で戦争、争いのトータルは、なんと 3000 年間、どこかで奪い合い、倒し合い、殺し合いが繰り返されてきたのが人類の歴史であります。鉄砲の弾だって、天から降ってくるものではなく、この地球上にある資源を使って、人殺しの道具に使う、なんと愚かなことを人類は重ねてきたのか、これが事実です。もうこんなことに終止符を打って、全人類が互いに助け合って生きるという世の中をつくらない限り、個人の幸せはありません。

今、ボタン戦争の時代です。戦争前夜といわれており、心ない大統領がボタンを押したら、8 分後には名古屋にも飛んできます。広島の 80 倍から 100 倍といわれる威力を持った原子爆弾です。名古屋市民は全滅する、全人類が生存が難しいといわれる。人間が絶滅する時代の中で私たちはおります。

日本も日本だけではもう生きていけれない。あらゆる国と貿易をし、そして、足らなかったら足してあげるというような優しい心を持った国民性を養って、全世界の人々と仲良くして、そうならなければならないのが、ここにおられる皆さまがたの思いであるとともに、私は義務だと思います。次の世を受け継ぐ人々が、私たちの今、住んでる世の中よりも、より安全な、より繁盛している世界をつくり、残していくのが、私たちの務めではありませんでしょうか。きょうの戦争体験の拙い話でございますが、どうか、こういう事柄を一つ、心に置いて、おくみ取りいただけましたら、大変、幸せに存じます。最後までご清聴いただきまして、まことにありがとうございました。心から皆さまがたのお幸せと子孫の繁栄を願って。

戦後にも禍根を残す

戦争体験語り継ぐ会 会員　　江間　万里子

私は、父が豊川海軍工廠であっという間に、8 月 7 日に行ったばっかりに亡くなったんです。戦争って、終わったらすぐ、その後、楽しいことが待ってるわけじゃなくて、その後、残された者がもう本当に大変だってことを母と一緒に体験しました。私は助産師をしてます。私たちの時代は、日赤か名大、私立か国立、この四つがあり、まず看護婦にならないと助産師にはなれないです。あんまり考えもしないで日赤を選んだんですね。試験科目が易しい科目があるところを選んだほうがいいと、日赤を選んだんです。

そしたら、母がとっても悲しい顔をして「なんであなたはお父さんが亡くなってるのに、日赤を選んだの？」っていうんです。

母の教師やいろいろな人の話を聞いたんですけど、自分で決めてしまったので、動かなかったんです。あの頃、高校 3 年生用に雑誌『螢雪時代』があったんです。その雑誌に「日赤の看護婦さんたちが労働組合の中で、寮ではこんなふうに暮らしてて」とか書いてあったので、私は「絶対、日赤に行こう！」なぜか決めて日赤へ入ったんです。

助産師になって、仕事をしながら、土曜日は半日で仕事が終わりだったので、その後、医師会による電話相談に参加してたんです。電話相談には、赤ちゃんのことや大人の病気のことや、いろんな相談が入ってきます。ある先生から「君はどこの看護学校を出たのかね」って聞かれたので、「日赤です」って言ったら、「僕は日赤を出た看護婦さんは大嫌いだよ」って即、言われました。「僕は戦争に行ったら、道端で具合が悪くなってたときに、日赤の看護婦さんだけが、病気の人やけが人を置いて、軍と一緒に帰っていってしまった」そうです。大嫌いと話してくれて、そこで初めて知った日赤の体質でした。後で勉強して分かったんです。「日赤が大嫌い」って言われ、複雑な気持ちでした。

私の父の話をすると、私は新城だったので、豊川海軍工廠が近くにありました。だから、父は自転車で行ったり、電車に乗って行ったりして、銀行を辞めて、働きに行っていました。背が高かった。父が亡くなったとき 3 歳だったんですけど、3 歳でも見つけられるような。だから、「よく駅まで迎えに行ってたんだよ」と母から後で聞きました。

「日赤が戦争とどんな具合に関わってたのか？」そのときは本当に知りませんでした。今、皇后陛下とか行事があると日赤が出てくるんですが、そういう関係にあるところだと分かりました。

（注）体験から感じたことを述べられていますが、現在の日赤の活動を否定や差別するものはありません。
文中の表現：看護婦⇒現：看護師

昭和のくらしと戦争

戦争体験語り継ぐ会 会員　　福岡　友一

昭和 9 年生まれで、おじいさんの時代から有松に住んでおります。昭和 16 年から国民学校と名前が変わり、僕はその第 1 回の入学でした。その冬、12 月 8 日の寒いとき、全校生徒が校庭に集まる指示があり「何があるかな？」と思って行きました。軍艦マーチがあり、曲が終わった

ら今度は「大本営発表。わが軍はアメリカのハワイの主力艦隊を攻撃して全滅させた」それで戦争は勝ったような、話だったんです。国中が「戦争が始まったけど、日本は勝った」って安心しとったわけです。

しかし、それからが大変で、品物が全部、店からなくなったわけです。当時は、アメリカから全部、石油から食料も、ほとんど輸入して日本は生活しとる。そのアメリカと戦争やった。子どもの頃だったから「大変だ」と言っとるの見ても、あまり深く考えんでおったわけですが。店からは全部、品物がなくなって、一番初めに甘いものがなくなって。配給制になって、米とか食べ物、全部、配給。米でも２カ月に１日か２日分だけしか配給がなくて、あとはトウモロコシのかけらとか満洲大豆や大豆の油の絞りかすとか、そのようなもんを食べとった。米粒も数えるほどしかないすいとんを食べておったわけです。みんな、大人たちが買い出しに行って、トマトとかいろんなもんを、お金はほとんど通用せんので、着物とかそういうもの持って、物々交換しとったわけです。

そのときの遊びとしては、缶蹴りとかガラス玉入れ、兵隊将棋、しょうや（メンコの名古屋弁）、縄跳びとか、はないちもんめ。女の子は、手まりとかお手玉等でした。

有松は名古屋の中心からちょっと離れており、爆撃はほとんどなくて、有松の上空を B29 が 100 機ぐらいの編隊を組んで、三角の形を作って、上空を通る様子を見とったわけです。学校では、空襲警報が発令すると、全部、勉強をやめて家へ帰って、自宅待機しました。初めのうちは、家へはよ帰れるって喜んどったけど、空襲も名古屋はほとんど焼け野原で、だんだんと有松のほうへ近づいてきたわけです。爆弾が落ちたときには耳をふさいで、目をふさいでって、そういう練習ばっかしとった。空襲警報が、初めは喜んどったけど、だんだん怖くなってきたわけです。有松の５発ばかり爆弾が落ちましたけれど、幸い、犠牲者はなかったわけです。後で考えてみると、名古屋には焼け野原で爆弾を落とす所はないもんで、そのまま（爆弾を）持って帰らず、落としていったんだなと思っております。

満蒙開拓義勇軍の募集も、全校で１人は出さないかんノルマがあり、なかなか選考に困ってました。みんなで推薦し、おだてて、１人を何とか確保して、豊橋に行くのを見送りに行ったことを覚えております。満蒙開拓義勇軍もだんだんと内容が分かってきて、応募する人がなくなってきていたわけです。

桜台高校の近くに高射砲陣地がありました。桶狭間にも照空灯の陣地がありました。8000 メーターの射程距離しか日本の高射砲はないもんで、１万メーター飛ぶ B29 の下のほうで花火のように硝煙が上がっておりました。子どもにも見えて、音もよう聞こえてきました。

空襲で一番悲惨だったが、愛知時計電機が爆撃されたことで。日本は大和魂で解消できると言い、レーダー（電波探知機）の開発をほとんど怠っとったわけ。そのレーダーの誤信によって、愛知時計は、敵が脱却し、空襲警報解除。皆、作業開始のため現場に戻ったら、爆弾の攻撃で、白鳥橋の所の愛知時計がほとんどやられた。従業員が全部、職場に着いとったから、犠牲者が多かったわけです。その爆風によって、風に流されて青図とか事務用品が有松上空まで飛んできた覚えがあります。紙くずがいっぱい空から飛んでくる。愛知時計から飛んできた紙くずでした。

もう一つは、今のナゴヤドームのところに三菱の発動機、エンジン工場、ものすごい大きな工場があったわけです。灯火管制で真っ暗にしとったけど、アメリカは、クラゲのような、ふわふわ浮く照明弾を落とし、真昼みたいになっちゃった。有松からも照明弾がよう見えたわけです。昼間より明るくなったもんで、攻撃されて、発動機を作る大工場が一夜のうちに全滅しちゃったわけです。当時は「エンジン」と呼ばず「発動機」と呼んでいた。

日本は、発動機を作って、大江の工場まで運ぶのに、牛車で発動機を運んどった。結局、石油がないもんで車は使えんわけだった。見たけど「シーッ」と顔を合わせて「秘密秘密」ってことで。そのようなことをやっており、とてもじゃないが勝てるような要素はなかったわけです。

いろんなことで戦争のことを言うと、きりはないですが。食糧難で校庭まで運動場まで全部鍬で耕し作物を作ったり、道端にも全部、大豆、植えたり、そういうことをしとったわけです。今日はこれで終わります。

【体験者は語る】

佐藤親房さん、種池富美子さん、舟岡洋子さんから戦争体験のお話を伺いました。また、同席の西﨑邦雅さんはお話とは別に体験をまとめてくださいました。戦争体験を語り継ぐために貴重なお話をお聞きできました。聞き取りのお話は、語っていただいた雰囲気を残しつつ、読みやすくするために内容を編集し、その後に思い出してくださったことも含めて作成しています。皆さまのご協力に感謝申しあげます。ありがとうございました。

２０２４年４月２０日：緑区内喫茶店にて
話し手（座談会記録：イニシャル表示）
佐藤親房さん（Ｓさん）　種池富美子さん（Ｔさん）
舟岡洋子さん（Ｆさん）　西﨑邦雅さん（Ｎさん）
聞き手（荒川淳子）
西﨑邦雅さん（主に戦後の食糧事情について寄稿）

佐藤親房さん

私が小学一年生の時に、父親が赤紙で出征していった。戦死しているので、それ以降親父の顔は全然、写真でしか記憶は無い。２０年に「帰ってくるかなぁ」と思ってたら、戦友が骨箱を持ってきた。その中にお骨は入っていない。「佐藤」の印鑑がひとつ入っていただけ。

怖かったという体験は、住んでるところが（緑区）片坂だったのでほとんど無い。直接、爆弾が落ちたとか、焼夷弾が落ちたとか、いうことは、鳴海の町の中だから。ただ、日本車輌に焼夷弾が落ちたのは見たことがある。終戦前、昭和１９年末くらいだったか。焼夷弾が落ちて花火みたいに見えたことは覚えている。遠目に見たら綺麗だなという感じ。それと、鳴海製陶が航空部品をやっていた。あれで狙われて爆弾をそうとう落とされた。けど、周りには落ちるんだけど、鳴海製陶には落ちてないんだよね。ひと山鳴海製陶だったんだから。命中率が悪かったんでしょ。爆弾は周りにばかり落ちてましたね。その関係か、古鳴海とか、穴が空いていましたね。

親父が招集で取られているので、私のおばあさんが「兄弟４人全滅しては困る」と、上の私と妹を大口町へ疎開させた。それで、１年生は鳴海だったけれど２年生は大口町だった。父親の姉さんの家に預けられた、兄弟２人でね。下の兄弟は名古屋にいた。まだ小さかったですね。２年生の半ばまでそっちにいたけど、だんだん戦争が激しくなってきて「死ぬ時は一緒の方がいいだろう」ということで、戻ってきた。

そのおばさんの家でも、白いご飯は食べられたけれど、おかずは何も無い。お醤油を箸の先につけて、お醤油をなめながら食べる。お醤油で箸をぬらして、そのお醤油でご飯を食べていた。今考えれば、野草でも採ってきてお浸しにすれば食べられた。でも、その時は小学２年生だったから何も分からんかったね。

お袋と、義理の母、この人はしっかり者だったから、僕らもなんとか食べてきたけど、定職が無いから母親は大変苦労した。終戦直後は「担ぎ屋」という仕事をしていた。東京なんかは食糧難だったので、こちらでサツマイモの粉を調達して、担いで東京へ。それで食べられた。私も１回連れて行かれた。東京へ入ってから珍しいもんだから、途中で迷子になって。お巡りさんに「どっから来た？！」といわれ「鳴海だ」と答えたけど、鳴海なんて東京は知らんわね。そしたら「晴海」と間違えられた。荷物担いでいるから、交番へ連れて行かれた。お袋が飛んできて、事情を説明して、解放された。あの時代は接収されることがある。へたに捕まると荷物を接収されてしまう。それはなんとか大丈夫だったが、その荷物を持っていった先がなんと警官の家だった。面白いでしょう。

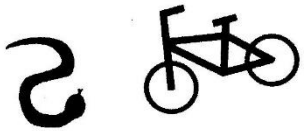
東京へ物資を持っていくのに、盗まれたりは無いけれど、運んでいる間に、検査で接収されることがあって、やはりそれが怖かった。結局、配給制度だったから余分に持っていると「どうしてなんだ！」となった。警官ですね。権力、抜き打ちで。そういう時代だから大目に見てるんでしょうけれど、上から「やってこい」と言われて、やらないかんということでしょう。

小学生ではなんかよく分からんけど、４人くらいで運んでいったのに連れられていった。物々交換では無かった。帰りにお金をもらったんだろうと思う。物は何も持って帰ってきてないから。ただ、子どもだから何も分からずに、２～３キロの荷物を背負わされて。そんなチビだと交通費はタダだからね。子どもはタダで乗られたから行ったんだと思う。タダで荷物を運べるってことだったと思う。

いわゆる４～５人の運び屋仲間に連れられていったんですけども、ひとりしか覚えていない。そこの家にお風呂をいただきに行ったこともありましたんで、親しくしていたみたいですけどね。もらい湯に行った家は男性でしたね。担ぎ屋仲間は男性も女性もいましたね。中島橋の橋を渡ったところに銭湯がありますね。あれは私が小学生の頃からあって、時々通っていましたね。

しばらくして食糧が自由に出回るようになったら必要ない。それからは土木工事。そんなガタガタの状態だったから、建設土木の工事が結構あった。日雇いで行っていた。２０年に戦争が終わって、５～６年してから、ちょっとした製材工場の常雇いで定年まで。身体もきついでしょうね。子ども４人で親父はいないので。終戦直後は恩給も入ってこないから。法律がいろいろできて軍人恩給が入るようになって楽になった。それまでは祖母と母とで担ぎ屋だった。

祖母は静岡の出身で、お寺の娘さんで。焼津の方は鯖の塩漬け、それを向こうの方から運んできて、こっちで行商、徳重（緑区）なんか、なかなか魚なんて手に入らないから、そういうところで売っていた。全部歩き。大変でしたね。



父との思い出、出征する前の記憶はほとんど無い。ただ、親父に乗せられた自転車で扇川の堤防を走ってて、ヘビを踏んづけたということは覚えている。小さい子だから前に乗って、そうすると前輪で踏むわけ、「あずきへび」というやつで、縮み上がった。ショックでしたが、親父は知りませんわ。そのままスーッと走って行っちゃって。親父は妹の方をかわいがっていた、女の子だから。父のことは、母よりおばあさんから聞いた方が多い。ああいう時代だからお嫁さんというのはやっぱり、それはもう子どもの世話ばっかりですよね。

親父が生存しておった時代はやっぱり人並みに裕福だったが、戦争へ行って死んでしまったら地獄でしたね。お百姓さんは食べるものは自分で作れるからいいですけどね。私の家は借家だったから野菜とか作る自分の家の土地が無かった。僕らは本当に食べるものが無かった。おぞうすいなんてごちそうですよ。サツマイモはツルの先に葉っぱが出る、そこは結構美味しかったんですよ。味付けにもよるけれど。煮付けにすると美味しい。ツルは硬くてだめですけどね。大概のものは口にしましたね。

学校でお昼に弁当を持っていくという習慣は無かった。私は給食を食べられなかった。お金を出さなきゃいけなかったから。親父が戦死しているから、それが払えなかった。だから、みんなは給食食べてたけど、私は食べられなかった。しばらくしてから福祉の方で食べられるようにしてくれましたね。

種池富美子さん

私は豊川で、海軍工廠よりもうちょっと北の方になります。４年生の時に海軍工廠の空襲に遭った。

当時は学校に行ってもお勉強は全然していない。隣の神社の掃除や運動場を耕してお芋を作っていた。それでも足らないといって、よそのところに畑を借りて、お芋を作りに行っていた。本も無かったような気がするよ。学校に入った頃はあったような気がするけれど。新聞紙みたいな、折りたたんで、あれは戦後かなぁ。小学校の頃はほんとうに勉強しなかった。もっと勉強すれば良かったと思うけれど。とにかく働きの援助をして、食糧の増産をしとった。それに、竹の棒を持って、突く練習！「もしアメリカが来たら突くんだよ。」ってね。消防訓練とか、防空壕に入る練習とかね。いかに早く入るか。

海軍工廠空襲の日、学校へ行ってもお勉強はしないで「今日は芋畑の草取りだ」と言われて、みんなワイワイいいながら畑に向かった。ちょうど一生懸命草を取っていた時かな、空襲警報になって「みんな家へ帰れ！！」と云われ、三々五々走った。周りは野原、木がいっぱい生えてるので、そういうところを潜りながら、家まで帰っていった。家に帰ると、障子が全部爆風で落ちていた。家には母たちはいなく、防空壕へ。当時海軍工廠に来ていた若夫婦に家を貸していた。そのおばさんが「こっちおいで！！」と呼んでくれた。防空壕へ入れてもらった。とにかく必死で逃げたのは覚えている「こんなところで死んではいかん」と。Ｂ２９のアメリカ兵は、田舎の方なんか気にならないみたい。兵器を作ってるとか、爆弾作ってるところを、早く爆撃をしようと必死！１００機を超えるから空襲の時の音はものすごいです。Ｂ２９が上を飛んでいるので、見つかってはいかんから、隠れて隠れて帰っていった。私の家はちょうど三方が竹藪になっていて、上手い具合に帰れたんですけどね。姉はもう少し、今の豊川っていう方に行っ

ていて、しばらくしてから姉もどうにか帰ってきてた。その時どういう風に姉は帰ってきたか分からないけど、とにかく怖かったですね。

海軍工廠以外に豊川には空襲は無かったですね。私の家の方は全部豊川海軍工廠だったね。あそこは兵器をすごく作っていたので、やられたんですね。かわいそうだったよね、若い方たちがね。十何歳とかいう子たちが２０００人以上亡くなってるものね。学徒動員で。その人たちは大変だったと思うよ。小さな防空壕がいっぱいあったそうで、学徒動員の子が入ろうとしたら、大人が居て「若造はいかん」とか言ってなかなか入れてもらえなかったと。松の木もたくさんあるから、そういうところに隠れながら、入れるところを探していたみたいで。

我が家は田舎（長草）だから、山の中に入っちゃえばわからないし、だいぶ離れていたからね。空襲警報があると、とにかく家に帰らなきゃいけない。警戒警報があって、空襲警報があると、先生方でも、子どもを早く帰さないと何かあるといかんと思ったんでしょ。だからみんなそれぞれ自分の家に走って帰った。どう帰ろうかとか、分からないでしょ、山の中を縫って帰った感じ。なるべく隠れられる場所を探しながら、外に出てはいかんと。伏せてはいなかったと思うけれど、走って木の陰に隠れるとか、そういうところがあったからよかった。狙われなかったからよかったね。

爆弾でやられた人はみんな真っ黒くなっていた。しらないでいるとウジ虫が湧いてすごかったという話を、後で聞いた。私の嫁ぎ先のお母さんも名古屋で空襲に遭ったらしい。主人も子どもであちこち飛び回っていたらしいけれど、お母さんが焼夷弾にやられて、薬が無くて水で流していたのかな、衛生状態も良くないし、薬なんて全然無いんです。

海軍工廠がやられてから、その近くの中学に自転車で通うようになった。海軍工廠の中を通っていくけれど、あっちもこっちも焼け野原で、もう怖かったですわ。守衛さんがおって、何かを取られないようにと思うのか、ずっと詰めてみえて。行く道はボコボコ穴がいっぱいあって。防空壕がいっぱいあったみたいでね。長一いことあっちもこっちもボコボコでしたね。

戦後しばらくして、中学の横にお墓ができたんですね。海軍工廠でやられた方たちが山の方へ埋められていたけれど、お墓のところに持ってこられて焼かれたんですよね。だから、その匂いが教室にいっぱいになって、あの匂いだけは嫌でしたね。かわいそうとかいうことではなくて、強烈でしたね。

家の方から名古屋が燃えるのが見えるんです。今、名古屋がやられてるね、とか。あの頃地震もあったしね。隠されていた三河地震、疎開の子どもたちもたくさん亡くなって、西尾の辺りはひどかったみたいですよ。昔は消防団があって、片付けとか、父たちは行っていた。泊まりかどうかは、小さい頃だからあまり分からない。私と姉と、上に兄が２人いたけれど、川に泳ぎに行って、上の方から汚物が流れてきて、赤痢になって、２人同時に亡くなっちゃったんですよ。兄たちを小さい頃に亡くしているから、そういう寂しいことは、私たちの前ではあまり話さなかった。母も言わなかったし、父も言わなかったですね。だからあまり戦争の惨めなところはよく分からないんですけどね。

食べ物は、農家だったので、そんなに苦労することは無くて、充分にあった。お芋、お米、野菜とか。でもタンパク源は少なかったですね。鶏を飼っていて、鶏の卵と、父がその肉を作ってくれて食べていたけど、それから鶏は嫌いになった。かわいそうでね、食べられなかったんです。父は戦争には行かないで、農地を耕していた。兄たち二人を同時に小さい頃亡くして、その後に姉や私が生まれたので、すごくかわいがってもらった。珍しい食べ物があると買ってきて食べさせてくれた。

戦後は何食べとったかな？学校では食べとったか、昼になると帰っていたか、どうだったかしら。給食は無い。お弁当も持ってこられる子もあったかなかったか。でも、一番最初の給食を私たちはもらってる。肝油をもらったり、脱脂粉乳を飲んで嬉しかった。そんな程度かな。

舟岡洋子さん

私は、四年生の時、富山市内の母の実家へ母と妹と私の三人で疎開しました。これまで毎年夏休みに訪れていた馴染みの場所であり、祖父母従兄妹達もおり、楽しい処だったので喜々として向かいました。

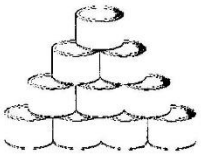
配給の切符を握り「おかゆ」を食べに出掛けた時も、お店の前で長い時間並んで順番を待ち、丼一杯のおかゆを食べましたが、それも家族全員でのお出掛けで、ちょっとした「外食気分」で楽しかった記憶です。

富山市も大きな不二越と云う軍需工場があったので「近々爆撃があるかも」と云う話が飛び交い、今度は富山の「福光」と云う山奥の父の実家へ、私と妹だけ疎開しました。農家でしたので祖父も祖母も朝早くから田畑に出て行き、夕方暗くならないと帰ってこず、妹と二人縁側に腰掛け、だんだん薄暗くなってゆく空を眺めて、待っていました。お腹が空くし、とても淋しく悲しかったです。妹はその時を思い出すのか、夕暮れは苦手です。東京にいる妹は今でも用もないのに、なんとなく夕方になると電話をかけてくる事があります。

私も妹も皮膚が柔らかく、馴れない田舎生活であちこち虫に刺され、痒くて掻きむしるので、そこが膿んで膿や血が出て、特に、両足が重傷で、おできが沢山繋がってしまい、それはそれは醜い状態になりました。会いに来た母がその有様を見て「可哀想に」と涙を流しながら、薬を塗り、足全体をグルグルに包帯で巻いてくれました。私は一ヶ所傷跡が今でも残っています。父と母が私達に会いに来た丁度その夜、富山市が爆撃を受けました。

次の日の朝、父と母は富山の母の実家へ飛んで戻りました。母の実家は全焼でした。見渡す限りの焼け野原の中、ポツンポツンと土蔵が焼け残っていただけだったそうです。ところが折角焼失を免れた土蔵が突然火を吹いて燃えあがるのです。爆撃で熱を持った土蔵の土壁が、完全に冷め切ってから扉を開けないと、火を吹くのだそうです。

家も全て焼けてしまっていたから、何も無い。少し土の中に入れていた物、味噌、醤油、砂糖とか、使わない食器とか、ちょっとしたお米など、それが助かったので、食べられたんです。いとこの友だちが缶詰工場に勤めていて、そこの工場の缶詰と貯めてあった野菜、玉ネギか何かを煮たお料理を食べていました。母の実家ではいつもいつもそのお料理で、今でもそれは嫌いなんです。



戦後に母の実家から父の実家に食べ物をもらいに行くけれど、やはり接収にあいました。駅で取り締まりがあり全部取られてしまう。いくら父の実家からもらってきたと言ってもダメ。冬なんか、父の実家は豪雪地帯で、荷物背負ってるので、大変でした。母は腰まで雪の中、そこから足を一本抜くのも大変でした。それで、駅へ行って接収されて・・・ほんと大変でした。

やがて、終戦を迎えたその年の二学期に名古屋に戻りました。学校の校舎は焼け残っていましたが、使用出来る状態になく、学区内で焼失を免れたお家の部屋を借りて、分散して勉強する事になりました。私は鉄工所の二階の広間でした。机も各自持参する様に云われ、一人一人机らしき代物と座布団を用意しました。私は父が作ってくれました。黒板と机を並べて寺子屋の様に座ると、部屋はいっぱいいっぱいで余裕がありませんでした。

名古屋の家と母の実家の仮住まいと二ヶ所で爆撃を受け、何もないところからの再出発でした。

父も母も、また、兵隊に行っていた親戚の人達も全員無事に帰還し、その後の人生を全う出来た事は幸いであったと感謝しています。

【食糧について】座談会風

Ｆさん：鶏は家で飼っていたけれどね。学校に行って帰ってきて一匹いない。「すき焼きだ！！」と喜んでいたら、それが出てきたりして、そういう生活でした。かわいがっていた、卵を毎日もらってきているのに、それがもうキュッとなってね。今でも鶏肉ダメですね。

Ｔさん：私は匂いがダメ。

Ｓさん：吊してね、血を抜いてね。

Ｆさん：わぁ、そういうのは知りません。

Ｓさん：叔父のところは兎を捕ってきて、後ろ足を縛って吊して血抜きするんですよ。あれを見ているとね。

Ｎさん：小学校２～３年だったけど、友達と遊んでると「おい、来いよ」と言われて「血を飲め」と言われて、飲まされました。生暖っかいのをね、栄養があるから。

Ｆさん：食べれない、鶏の皮ブツブツのある、美味しいと言われるのだけどね。

Ｓさん：たんぽぽをお茶にしましたね。

Ｆさん：野草を食べましたね。アカザ、あれは美味しい。ヨモギも美味しい。

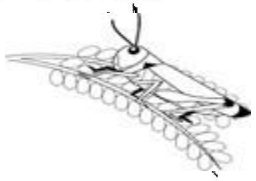
Ｎさん：スカンポ、しゃぶってね、美味しい。スカンポスカンポっていう歌がありますね、ちょっと酸っぱい。そういう野草はなんでも食べたね。

「スカンポ」は「イタドリ」の呼び名

スカンポの歌【すかんぽの咲く頃】

Ｆさん：イナゴはどうですか？（皆さん、頷き「食べましたね」）

Ｎさん：イナゴをかんぷくろ（紙袋）に入れて持って帰って、炒ってね。佃煮にすると美味しいですよ。



Ｓさん：羽だけむしってね。

Ｎさん：つくしとか芹とかね、食べたよね。

Ｓさん：田んぼの畦道につくしがいっぱい生えてましてね。

Ｎさん：何でも食べて、食べれるものは何でも食べた。

Ｆさん：ほんとにそうですね。変なものを食べてお腹を壊したとか、そういう記憶はあまりないね。ちゃんと食べてよいものを食べてた。

Ｓさん：芹はよく似た毒の草がある。そういうのは教わっていた。今はその知恵が伝わってないね。自分の経験したことは分かるけど、経験していないからね。

Ｎさん：そういうものは必需品だったからね。タニシなんかよく取りに行ったでしょ。

Ｆさん：タニシね、そうそう。

Ｎさん：ツボさんとかね、あれは大事な食糧だったね。

Ｓさん：今で言うタニシだね、田んぼにいっぱいあったから、バケツいっぱい取ってきたね。

Ｎさん：田んぼに入ってね、ヒルがいっぱい吸いついてね、血を吸うんですよ、今思うと友達とタニシ取ったり、楽しかったね。

Ｆさん：良い経験だったね、今はできないですよね。

Ｎさん：今思うと昔は良かったね、何にも無いけどね。

Ｓさん：池の水を全部抜いて、日常茶飯事で、タニシ取ったり、ドジョウ取ったりね。

食べものを中心に、懐かしい思い出話に花が咲きました。戦後の暮らしの様子、物資の少ない中での生活の知恵も、お話くださいました。

２０２４年４月２０日
文責：荒川淳子

西﨑邦雅さん

先の悲惨な戦争は、昭和１６年１２月８日に開戦、２０年８月１５日に敗戦で終わったわけです。私の生まれたのは昭和１７年２月ですから、戦争についての記憶は全くありません。戦後の食べ物について少々覚えているというくらいで、記憶は５歳以降の曖昧なものです。

現在９０歳前後の方々に戦中戦後の食べ物について伺うと、自分たちは食べるものが無く、辛い思いばかりだということでした。毎日薩摩芋ばかりとか、薩摩芋の芋蔓とか芋粥、大豆を炒ったものを袋に入れて持ち歩き食べた。米ぬかをだんごにして食べた。但し、これは腹が減っても二度と口にいれたくない、食べられるものではなかったと。野草類も煮たり炒めたりなんでも食べました。戦争中も戦後も、米、麦、味噌、醤油、砂糖、塩等、生活必需品が配給という制度でした。でも、充分ではなく、遅配で手に入らず、毎日がひもじい思いでした。自分の周りにも、栄養失調でお腹がポンポンになった小さい子どもさんがいたことを覚えています。

４歳頃の記憶で、祖母の田舎、中島郡祖父江町に疎開していたということですが、その頃の日常生活の覚えは何もありません。５歳くらい（昭和２２年）からは覚えていることもあります。昭和２０年秋ごろに疎開先より名古屋に戻ったそうです。家は中区鶴舞公園の近くでしたので、空襲で焼けてしまいましたから、父の勤め先の焼け残った社員寮に入居して戦後の生活が始まりました。

両親が最初に取り組んだのが、焼け跡の瓦礫を鍬と鋤、スコップで耕し、畑を作ることだったそうです。姉と私も一生懸命に瓦礫を拾い集めた思い出があります。主食、調味料等、全て配給だったそうですから、手近な野菜類で自給自足することが食べる為の重要なことでした。約１５０坪位の畑を開墾し、種々の作物を作りました。昭和２３年に私も小学１年生となり、いろいろ手伝ったものです。作った野菜類は、小麦、薩摩芋、馬鈴薯、南瓜、西瓜、胡瓜、大根、茄子、トウモロコシ、トマト、里いも、ネギ、白菜、人参、ゴボウ、玉ネギ、小松菜、ほうれん草、砂糖キビ、落花生等、思い出すとよくいろんなものを作ったなと不思議です。

姉と私の仕事は草むしりと害虫の駆除、駆除といっても手でつまんで処理することです。そして、肥料を撒くことでした。畑の畦に肥料

を撒くのですが、当時の肥料は今のような化学肥料ではなく、便所より屎尿を肥桶に汲み取り、柄杓で撒いたものです。畑まで距離があり、姉と天秤棒で担いでいくのも難儀でした。

でも、この畑である程度自給自足できたことで、食べるものが無かったという記憶はありません。両親のお陰で家族５人食糧の無い時代を乗り切れたと思います。

両親は祖母と子どもにまず食べさせてくれました。今思うと感謝の気持ちで一杯になります。

覚えている食事は麦ばかりのごはん、薩摩芋ばかりのごはん、大根の雑炊、小麦粉で団子を作った水団（すいとん）等です。お腹がすくと、薩摩芋を蒸したり、ジャガイモを煮て塩をつけて食べたものです。それも充分あるわけではないので、いつでも食べれる訳ではなかったです。でも、ひもじい思いはありませんでした。

【畑での野菜作物類の思い出】

小麦

冬の冷たい１～２月頃、霜の降りた早朝、学校へ行く前に麦踏みをして出かけました。麦の成長を助けます。６月頃、実った穂を刈り取り、脱穀し、小麦を製麺所に持っていき、生麺や乾麺に変えてもらいました。

薩摩芋

秋の収穫は楽しいもので、芋にも、ベタ芋と金時芋というホコホコの芋があり、金時芋は嬉しいものでした。食事が芋であったり、麦ごはんに混ぜたり、主食と言っていいほどでした。冬にかけて焼き芋、切干しと貴重なものでした。そして、小麦粉と薩摩芋を団子にして蒸した、鬼饅頭は主食であり、おやつでした。

南瓜

これは焼け跡の瓦礫の山に蔓を伸ばして実をつけてくれました。貴重な食糧でした。栗南瓜はおいしいものでした。南瓜も準主食でした。

胡瓜・茄子・トマト

夏になくてはならない野菜です。楽しい思い出は夏の早朝、塩を

持って畑で胡瓜、茄子、トマトをもぎ、塩を付けてがぶり付いた味が忘れられません。

西瓜・トウモロコシ・サトウキビ

おやつとしてよく食べました。

玉ネギ・里芋・白菜・キャベツ・人参・ゴボウ・小松菜・ほうれん草

食卓にいつもあった野菜です。

馬鈴薯

主食の代用として、保存食として、重要でした。ジャガイモを蒸して、塩をつけて、よく食べたもので、お腹の足しになりました。

【肉】

牛肉と豚肉は縁の無いもので、肉と言えば鶏肉と鯨肉です。鶏肉はタマゴを産ませる為、庭先で飼っていた鶏のものです。鶏の世話は子どもの仕事で、米ヌカとハコベを混ぜたもの、ミミズ等を与えたものです。冬は野菜クズと米ヌカでした。この鶏が老齢でタマゴを産まなくなると、鶏肉として食べたのです。鯨肉は捕鯨が盛んで安価で手に入ったそうです。鯨肉のフライ、ステーキ、水菜と鯨肉のスキヤキ等、美味しいものでした。

【魚介類】

鯖、サンマ、イワシ、ニシン、イカ、鮒、鮭、アサリ、シジミ等よく食べていたと思います。正月には数の子、ニシン、昆布巻きをよく食べました。軒下には新巻鮭がいつも吊りさげられていました。そして、イカの塩辛、ナマコの酢作り、鮒を大豆と八丁味噌で煮た鮒味噌などよく食べたものです。季節の魚は、春のメバル、初夏のタチウオ、冬のアイナメが豊富だったと思います。

その他、今では食べられなくなった身近な食材は、タニシとわけぎの味噌和え、つくしのタマゴとじ、イナゴの佃煮、ヨモギの団子、懐かしい食べ物です。今、思い出してみると、結構食べていたなと思います。こんなものを食べていたんだなぁという思い出です。

戦争体験語り継ぐ会　主催

「戦争と平和の資料館　ピースあいち」見学会

２０２３．２．１．（木）

戦争体験語り継ぐ会 会員　　佐野　環（めぐる）

「戦争が遺したモノたち」（第１１回寄贈品展）を観に、有志５人で出掛けました。

当館は２００７年５月にオープン、寄贈品展の第１回開催は2011.12.8.～2012.2.18.でした。以来、脈々と。

戦争体験者の高齢化・減少に伴い、手元に置くより、多くの人に観てもらおうという気持ちの現われでしょうか。大切に保管されてきた品々は、戦地や被災地を経て、今、伝えてくれます。実際に触れていた兵士や住民の姿、思いを。

とても貴重な歴史遺産です。

ピースあいちは、地下鉄東山線「一社」駅から北へ、片道９００ｍ程。ウォーキングがてらのお出かけはいかがですか？

《参加者の感想》

私は今回が初めての訪問でしたが、展示はテーマ毎に整理され、理解しやすい工夫がされていました。原爆や終戦前後に焦点が絞られやすい戦争の話を「１５年戦争」との表示があり、改めて長い戦争だったと感じました。企画展は市民の方々から寄贈された「戦争と平和に関わる資料」を整理して公開されていました。戦争の記録と照らし合わせながら根気の要る作業、関わる皆さまの思いの賜物だと思います。「１５年戦争」について、まだまだ知らないことばかり、あまりに壮絶で、実感できるはずもなく、ただ想像をするばかりです。また訪れて学ばせていただきたいと思いました。ありがとうございました。（荒）

「ピースあいち」の展示を見ました。毎日新聞に掲載されていた「満蒙開拓団とシベリア抑留の経験」のマンガ絵を拝見しました。

すでに戦後７９年も経っています。戦争体験を「マンガ絵」で描かれ、後世に残されています。私たちがそれを大切に未来の子ども・人たちに残して、語り継ぎたいと思います。（上）

久し振りに訪ねたピースあいちは、展示館にありがちなひたすら静的雰囲気というのではなく、館内は明るく美しく整備されて、人の出入りも多くて活気に満ちていた。

スタッフやボランティアさん達の熱意とご尽力のお陰と思う。

そこに遺族から寄せられた数々の展示品。大切に保管されてきた品に、戦争の犠牲となられた故人の思いも共にこもっていて胸打たれた。

戦争＝人同士の殺し合い、という究極の愚かな行為が、何故、今、繰り返されるのか？史実を知って、真剣に問い、考えたい（佐）

戦争にいい戦争はない“殺すなかれ”“殺されるなかれ”

ピースあいちを訪れて

日本では戦争体験をした人が少なくなってきている今。どれだけ正確に戦争の真実を伝え、語り継ぐ事が大切であるか。

戦争に対して「こわい」「かわいそう」と考えている人が多いと思う。

だからこそ、ピースあいちに出かけ、二度とこの惨禍を繰り返さない思いを心にとめてほしい（田）

「戦争が遺したモノたち」の企画展に会員有志で参加した報告です。当日には、寄贈者の父親(大正 13 年生)が、昭和 14 年に満 15 歳で、満蒙開拓青少年義勇軍に入隊し、茨城県の内原訓練所で、基礎訓練を受けて、満州に渡り義勇軍の体験を晩年に、漫画化した細井さんのご子息のお話と漫画の実物見せて頂いた。

「土の戦士　ああ！！満蒙青少年義勇軍　内原版、満州版」当時 15 歳の少年が体験した、内原訓練所や満州での生活や訓練体験が、生き生きと描写され、今の高校生に当たる多感な年齢の体験からは、お国のためへの強い意欲と懐かしさを感じました。

他にも貴重な遺品が、集められ、戦艦日向の「日向新聞綴り」という戦闘中の戦艦内での手作り新聞には、日中戦争の開始日からの 2 年間の記録など、多くの貴重な資料を見ることが出来ました。（吉）

「戦争と平和の資料館　ピースあいち」

-戦争と平和の資料館- ピースあいち (peace-aichi.com)

【編集後記】

2024年1月23日（火）、米国時間に終末時計が発表されました。
人類の終末まで「残り90秒」です。
２年連続で過去最短の記録が更新されました。

原子力科学者会報のプレスリリースでは、「残り90秒」を今年も維持した理由について、「昨年は、ウクライナ戦争でロシアが核兵器を使用すると脅したこともあり、世界の破滅にこれまでで最も近づいた「90秒」と設定した。今年も、人類は依然として未曾有の危機に直面している。」と指摘しました。（国際平和拠点ひろしまH.P.より抜粋）

ウクライナとロシアや中東地域など、戦争が続き、悲しいことに世界各国の利権も絡み、より複雑化している様相です。日本も情報がもたらされないままに、戦争に関わっていく歩みが危惧されます。

世の中の情報発信には、避けられないフィルター（発信側と受取り側双方）がかかります。新型コロナウイルス感染症「COVID-19」関連についての情報は、マスコミ、テレビ放送の内容だけが現実とは限らないこともあります。ネット検索は、検索者が興味を持ちそうなニュースなどが優先的に表示される仕組みがあります。マスコミ、テレビ放送、ネット情報は大きな影響力をもっていますが、その情報がどのようなフィルターを通しているかを意識しないと、情報が偏ってしまう可能性があります。現代社会においては、これらのフィルターを自覚し、慎重に選別し、多様な視点から情報を得ることが重要です。

一つの事実をどう伝えるのか、この情報を発信する目的は何か、多様な価値観を持つ受取手に対してどんな影響をもたらすのか、など、情報発信とはとても繊細な作業でしょう。私たちの受け取る情報は、発信者（発信源）と受信者（各個人）の両方のフィルターが掛かることを避けることはできません。その意味で双方が自己責任を持って情報を扱うことが大切だと思います。

私たちも発信者としてこの記録集を作成し、今年で第３１集目になります。「二度と戦争をしてはいけない」命の尊厳と平和への祈りを込めながら、戦争体験を語り継ぎ、記録に残すことを大切に歩んできています。今年は戦争体験者から直接の語り継が叶いませんでしたが、少しでも戦争の悲惨さをお伝えできればと思っております。敗戦国だから味わった苦しみではありません。戦時下に置かれれば等しく、人としての尊厳は失われ、命は大切にされません。絶対に戦争をしてはいけないのです。今も戦時下に生きる人たちに祈りを込めて、編集後記といたします。

＜第３１集＞戦時体験記録集

令和６年７月２７日発行　戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会

＊この冊子は古紙パルプを含む再生紙を使用しています＊